村上春樹文學中日本古典文學的吸收：短編小說《獨立器官》試論

蔡佩青

淡江大學日本語文學系副教授

摘要

村上春樹曾多次宣稱自己對日本文學沒興趣，原因在於擔任國文老師的雙親從小逼他念日本古典文學。他在前期作品中頻頻引用世界文學名著，卻不正面提及有關日本的文學或傳統文化，似乎是一種少年反抗期的延續。但自 90 年代後半起，村上春樹的作品中陸續可見日本古典文學之名。如《海邊的卡夫卡》中提到了《源氏物語》與《雨月物語》；《1Q84》中引用了《平家物語》的橋段。而至短篇小說《獨立器官》，村上春樹首次引用和歌來代言故事主角的心情。

本論文以收錄於《沒有女人的男人們》中之短編小說《獨立器官》為主要研究對象，探究其中所援用之日本古典文學的故事典例，分析村上春樹在本短編小說中如何吸收日本古典文學的精粹。筆者認為村上春樹在《獨立器官》中使用了流行於日本中世時期的說話文學手法來架構故事，並將平安貴族藤原敦忠及其周邊相關野史軼聞巧妙地融入小說男主角渡會醫師的愛情故事中，使得本篇作品雖為現代社會之男女愛情故事，卻處處感受到日本古典文學的氛圍。正如村上春樹本人於《沒有女人的男人們》的前言中所言，他樂於在短編小說中試用各種手法與筆調來創作。而《獨立器官》中的日本古典文學敘事手法，可謂是村上春樹在短編小說書寫的一個新境界。

關鍵詞：沒有女人的男人們、藤原敦忠、和歌引用、說話文學

受理日期:2019 年 08 月 21 日

通過日期:2019 年 11 月 15 日

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

Comprehending of Classical Japanese Literature in Haruki Murakami's Creative Writings: Analysis of Short Story *"An Independent Organ"*

Tsai, Pei-Ching

Associate Professor, Department of Japanese, Tamkang University

Abstract

This thesis probes how classical Japanese literature was invoked in "*An Independent Organ*," a short story in Haruki Murakami's collection, *Men Without Women*. Furthermore, it will analyze how Murakami understands and digests the essence of classical Japanese literature in his work. Murakami has claimed, frequently, that he is not interested in Japanese literature. In his earlier works, world famous literature is often referenced. However, it is seldom that he would refer to any Japanese literature or traditional Japanese culture.

The rare use of classical Japanese literature in Murakami's early works seems to be an extension of his rebellious adolescence. His parents were both teachers of Japanese literature and forced him to study classical Japanese literature when he was young. Nevertheless, it is not until the late 1990s that readers first start to see the beauty of Japanese literature appearing in his published works.

The publication of the short story "*An Independent Organ*" is a milestone of Murakami's internalization of classical Japanese literature. This short story employs a writing method named "*Setsuwa,*" which is a narrative literature that was once popular in Japan's middle ages. *Setsuwa* is mainly used to write legendary stories derived from an oral storytelling tradition. Using easy to understand language, Murakami cleverly blended *Waka* poet Fujiwara no Atsutada's alienated poem and anecdote into the love story of his main character, Dr. Tokai, creating an atmosphere of classical Japanese literature that permeates the romance of modern men and women. As Haruki Murakami himself said in the preface of *Men Without Women,* he is fond of experimenting various creative techniques and styles in short novels. The narrative technique of classical Japanese literature adapted in "*An Independent Organs*" is surely a new achievement in the way Murakami writes short stories.

Keywords：*Men Without Women*, Fujiwara no Atsutada, Waka, Setsuwa

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

村上春樹文学における古典摂取の方法
―短編小説『独立器官』試論―

蔡佩青
淡江大学日本語文学科准教授

要旨

日本文学には興味がないと主張してきた村上春樹は、『海辺のカフカ』において初めて日本古典文学の最高峰と称される『源氏物語』を登場させ、そして『1Q84』では長々と『平家物語』の一節を引用している。このような「日本的なるもの」に対する意識の現れは、彼が長年の海外生活を切り上げ帰国した 90 年代後半から顕著となる。

2014 年に発表した短編小説『独立器官』に至って、村上春樹は平安歌人藤原敦忠の歌を引用し、主人公渡会医師の心境表現として用いることとなった。「逢ひ見てののちの心」に深い喪失感を覚え、終いに恋煩い故に自ら命を絶った渡会医師の悲恋物語には、引歌をはじめとする日本古典文学の手法が取り入れられている。また、物語の構成として中世説話文学の話型が巧みに取り入れられ、敦忠やその周辺人物に纏わる説話が渡会医師の人物造形に摂取されている。そのため、一篇は現代小説でありながらも随所に古典的な雰囲気が醸し出されている。村上春樹は『女のいない男たち』の「まえがき」に、短編小説を書く時にいろいろな手法、文体、シチュエーションを試していると述べている。『独立器官』はまさに彼の言う実験の場であり、春樹小説の新しい境地である。

キーワード：女のいない男たち、藤原敦忠、引歌、説話文学

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

村上春樹文学における古典摂取の方法
—短編小説『独立器官』試論—

蔡佩青
淡江大学日本語文学科准教授

1.村上春樹の古典的教養

> 僕は、両親が教師で国語を教えておりました。母親は僕が生まれる時にもう教師を辞めていましたんですけれど、一応二人とも国語の先生ということで、家では共通の話題として『枕草子』がどうとか、『源氏』がどうのとか出てくるわけです。それは子供にとってはあまり面白くない状況です。それで、僕は十代を通して二つのことを憎むようになる。一つは教師、一つは日本文学です[1]。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

村上春樹が日本文学をあまり好まないことは周知の通りである。特に日本古典文学について言及する際に、常に「いやだ」、「憎む」というようなネガティブな表現を用いてその嫌悪感を表明している。恐らく彼は小説を創作する際に、いわゆる日本的な要素、日本的な物語の創作手法をなるべく排除しようとしてきただろう。実際、デビュー作『風の歌を聴け』はまず英文で書き出してから日本語訳をしたそうだ。そのせいか、第 81 回芥川文学賞の候補作として挙げられた時に、選考委員の一人である滝井孝作氏に「外国の翻訳小説を読み過ぎて書いたような[2]」ものだと酷評された。

---

1 河合隼雄（1998)「9 現代の物語とは何か」『こころの声を聴く—河合隼雄対話集—』新潮文庫 p.236。村上春樹自身は日本文学を好まないことによく言及している。村上春樹（1997)「まずはじめに」『若い読者のための短編小説案内』文藝春秋。村上龍、村上春樹（1981)「日本の小説、外国の小説」『ウォーク・ドント・ラン』講談社ほか。

2 半藤一利編（1979)「芥川賞選評」『文藝春秋』昭和 54 年 9 月特別号、文藝春秋 p.376。

ところが、村上春樹は決して日本文学を全面否定しているわけではない。『若い読者のための短編小説案内』では、彼は、「僕は僕なりに、日本の文学に対して――少なくともそのある部分に対して――敬意を抱くようになったと思います。……意識的に日本の文学を自分から遠ざけておくことによって、自分の文章スタイルを徹底してオリジナルなものにしてみるのも面白い[3]」と弁解しているように、日本文学を敬遠する理由を説明している。このような心境変化は、1991 年に米国プリンストン大学の客員研究員として招聘され、その後ボストンにあるタフツ大学で日本文学の講義を持ったことをきっかけに、彼の作品や発言に徐々に見られるようになった。

まず、英文学者ジェイ・ルービン氏の依頼により、芥川龍之介の短編小説の英訳版のために序文を執筆した[4]。その序文には彼の抱いている日本文学に対する尊敬の念と、日本文学の作者としての自省の言葉が述べられている。

> 芥川は現代の日本の作家たちに――僕ももちろんその一人だ――何らかの教訓を残しただろうか？もちろん残っている。……ひとつは、技巧や人工的作話の世界に逃げても、いつか固い壁に突き当たることになる、という教訓である。……もうひとつの教訓と呼ぶべきものは、西欧と日本という二つの文化の重ね方についてである。……我々は日本という文化環境に生まれ落ち、固有の言語と歴史を継承し、そこで暮らしている人間だから、もちろん完全に西欧化、グローバス化することなどできないし、またする必要性もない[5]。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

[3] 村上春樹（1997）「まずはじめに」『若い読者のための短編小説案内』文藝春秋 p.11。
[4] Translated by Jay Robin（2006）*Ryunosuke Akutagawa:Rashomon and Seventeen Other Stories*, Penguin Classics。
[5] 村上春樹（2007）「芥川龍之介――ある知的エリートの滅び」ジェイ・ルービン編『芥川龍之介短編集』新潮社 pp.46-48。

プリンストン時代の村上春樹は、日本人として自国の文学・文化を海外に発信する橋渡し役を担うようになっただけではなく、日本国内の読者に対しても積極的に日本文学の良さを伝えるようになった。彼は「いくら俺は独立した個人なんだ、日本の文学とは関係なしに生きているんだと思っても、自分が日本人の作家で、日本語で小説を書いているという客観的事実に日々まざまざと直面しなくてはならないわけです。そしてまたそういう状況の中で、喉の渇いた人間がグラスの水を求めるように、自分がごく自然に日本の小説を読みたいと感じていることを、僕はありありと認識するようになったの[6]」だと告白し、「僕はあらたな生活の場に自然発生的に登場した『日本的なるもの』を、自分本来のものとして手に取り、注意深く観察し考察することによって、今ここにある自分の視点をより切実なものとして深めたかった[7]」と、異郷という場によって、故郷に対する感情が自然に生まれ、それに向き合うようになった自分を打ち明けている。

本人が自白しているように、これまで西洋風と思われていた春樹文学の作風は、幼い頃から両親に仕込まれてきた日本古典文学の教養と、日本文学を教授する教師になって気付かされた日本近代文学の涵養によって、次第に日本的色彩の濃いものに変化していく。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

2.春樹文学における古典文学の摂取

村上春樹の小説には夏目漱石の名とその作品名が頻繁に取り上げられているが、日本古典文学の作品名の初登場は、彼が長年の海外生活を終え帰国し、『ねじまき鳥クロニクル』以来 7 年ぶりに著した長編小説『海辺のカフカ』においてである。主人公の少年田村カフカが、佐伯という 50 歳を過ぎている女性の 15 歳の少女としての姿を、現実の中で目撃した、という幽体離脱の現象を図書館員の大島を通して説明した時に、かの有名な『源氏物語』が描く六条御息

[6] 同注 3、p.14。
[7] 同注 3、p.16。

所の生き霊を例として取り上げている。

それは〈生き霊〉と呼ばれるものだ。外国のことは知らないけれど、日本ではしばしばそういうものが文学作品に登場する。たとえば『源氏物語』の世界は生き霊で満ちている[8]。

カフカの見た不思議な現象は作品全体にわたる極めて意味深い重要な構成要素であり、主人公の恋の始まりと主人公の人生の再生のきっかけとなったものである。また、その後大島の勧めでカフカは『谷崎潤一郎訳源氏物語』を読み始める場面から、作者村上春樹の谷崎潤一郎に対する評価も読み取ることができる。さらに言えば、カフカが佐伯の生き霊を見るという物語の設定自体は、『源氏物語』から着想を得ているとも考えられよう。

そして、生き霊になる原因について、大島は上田秋成の『雨月物語』の一編である『菊花の約』を例に挙げてカフカに説明し、最後に「とても美しい文章だ[9]」と評している。しかしながら、『菊花の約』は命を犠牲にして自ら霊になることを選択した話で、生き霊となるきっかけの説明にはなり得ないため、大島は「信義や親愛や友情のために人は命を捨て、霊になる。生きたまま霊になることを可能にするのは、僕の知る限りでは、やはり悪しき心だ。ネガティブな想いだ[10]」と、古典文学における生き霊の位置付けを明確に定義せねばならぬかのように付け加えている。

では、なぜ村上春樹はここで敢えて上田秋成の作品を取り上げたのか。村上春樹は村上龍との対談では、次のように述べ上田秋成を絶賛している。

僕にとっての名文というのは恥を知っている文章、志のある文

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

[8] 村上春樹（2002)『海辺のカフカ（上)』新潮社 p.387。
[9] 同注 8、p.390。
[10] 同注 8、p.391。

> 章、少し自虐、自嘲気味ではあっても、心が外に向けて開かれている文章……というのは少し漠然としすぎているかもしれないですけれど、具体的にそれに近いものをあげていけば、スコット・フィッツジェラルド、カポーティ、上田秋成、少し質は違うけどレイモンド・チャンドラー、そんなところかな[11]。

村上春樹が挙げた名文と称すべき書き手の中で、上田秋成が唯一の日本文学の作家である。

『海辺のカフカ』には、『源氏物語』と『雨月物語』が挙げられ、作品の概要が作中人物の言葉のなかで説明されている。次の長編小説『1Q84』になると、さらに森鷗外の『山椒大夫』、中里介山の『大菩薩峠』の名が挙げられ、そして単行本2ページ以上にもわたる『平家物語』の「壇ノ浦の合戦」が引用されている。それは、主人公の一人である天吾と、ふかえりという少女との会話の一節で、ふかえりは記者会見で平家物語の「判官都落ち」を暗唱したと言ったため、天吾は「壇ノ浦の合戦」を指定し暗唱させた場面である。そしてその続きには、作品中に暗唱という形で『平家物語』を登場させた理由が明かされている。

> 目を閉じて彼女の語る物語を聞いていると、まさに盲目の琵琶法師の語りに耳を傾けているような趣があった。『平家物語』がもともとは口承の叙事詩であったことに、天吾はあらためて気づかされた[12]。

テクストの暗唱は本来の『平家物語』の姿に近い形であるという。また、ふかえりの超人的な記憶力に関しては、「テープでなんどもきいた」としていることからも、語り物として流伝されてきた口承

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

---

11 村上龍、村上春樹（1981）「僕にとっての名文とは」『ウォーク・ドント・ラン』講談社 p.129。
12 村上春樹（2009）『1Q84　BOOK1〈4月-6月〉』新潮社 pp.457-458。

文芸がここで再び聞かされて語り継がれていく、という文学継承の軌跡を描こうとする作者の意図が窺われる。それはいわば、村上春樹の積極的に日本文学に関わろうとする姿勢とも言えよう。そして、恐らく村上春樹自身もそのような方法で『平家物語』を理解していただろう。彼は村上龍との対談で、「いまでも覚えてるんだね、『徒然草』とか『枕草子』とかね、全部頭の中に暗記してるのね、『平家物語』とか[13]」と自ら証言している。

さらに、注目したいのは、森鷗外の名にしろ、「壇ノ浦の合戦」の引用にしろ、すべては旧字と歴史的仮名遣いが用いられていることである。このことから、村上春樹は古典文学を受容する際に作品の生きた時代を意識していることが看取されよう。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

3.渡会医師から権中納言敦忠、そして光源氏へ

以上、春樹文学における日本古典文学の受容について村上春樹自身が語った読書経験を通して考察したが、村上春樹の中に内在している「日本的なるもの」が彼の創作に与えた影響はテクストからの引例や引用にとどまらなかった。

『1Q84』から5年後、村上春樹にとって9年ぶりの短編小説集『女のいない男たち』が出版され、そこには「いろんな事情で女性に去られてしまった男たち、あるいは去られようとしている男たち[14]」の物語が6編収録されている。その1編である『独立器官』には、華々しい女性遍歴を重ねてきた美容整形外科医の渡会が、ある女性に深く恋をしていたが、女性の裏切りによって意気沮喪して拒食し続けた挙句、死に至った悲恋物語が語られている。物語は、平安中期の歌人藤原敦忠の「逢ひ見ての　のちの心に　くらぶれば　昔はものを　思はざりけり」の一首を以て、渡会医師の恋煩いの心境を代弁している。

『1Q84』における『平家物語』の引用と同様に、和歌の引用も歴

13 同注11「日本の小説、外国の小説」p.124。
14 村上春樹（2014）「まえがき」『女のいない男たち』文藝春秋 p.7。

史的仮名遣いが用いられており、また和歌の独特なリズムを表現するために、句ごとに1字空けで書き記されている。そのうえ、歌人名は藤原敦忠ではなく、当該歌が『拾遺和歌集』や『小倉百人一首』に収録された際に記されている権中納言敦忠とされていることから、作者村上春樹の、なるべく一般読者が馴染んでいるだろう古典作品の形を提示しようとしている、執筆方針が読み取られる。

『独立器官』において、敦忠歌が渡会医師の心情を表現するのに用いられているだけにとどまらず、さらに、この一首から展開された中世文学に見る敦忠像は、渡会医師の人物造形から『独立器官』の創作手法までに、影響を与えているのである。

3.1.色好みの貴公子

『独立器官』は、語り手の、渡会の人生についての論評と、渡会という人物を語るための断りとから始まり、そして渡会の人物像を描写していく。

52歳の筋金入りの独身主義者で、結婚や同棲の経験が無く、麻布の瀟洒なマンションで一人暮らしをしていて、月に二度はプロフェッショナルのハウスクリーニングに部屋掃除を依頼している。高年収の美容整形外科医で、六本木で「渡会美容クリニック」を経営している。美男とは言えないが顔立ちは整っていて、育ち良く物腰が上品で教養がある。同時に2、3人のガールフレンドを持ち、女性とはセックスよりも知的な触れあいを望んでいる。優秀な男性秘書がついている。

いわゆる色好みの貴公子である。このようなほぼ隙のない男性像は、村上春樹は好んで描くものだが、日本古典文学によく登場する平安貴族の姿を彷彿とさせる。ところが、『独立器官』では、敦忠の一首が引用されることを機に、渡会医師の貴公子像が崩れていくと同時に、敦忠像との重なりに気付かされることになる。

藤原敦忠は、延喜6(906)年に藤原時平の三男[15]として生まれ、

[15] 細川幽斎(1631)『百人一首抄』(跡見学園女子大学図書館蔵)には、「権中納言敦忠　時平公三男　実は国経卿の子云々」、「敦忠卿母嫁為国経卿妻後嫁時

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

母は在原業平の長男の、在原棟梁の娘である。敦忠は、母方の在原家譲りの美貌を持ち、『今昔物語集』では「形チ有様美麗ニナム有ケル。人柄モ吉カリケレバ、世ノ思ヘモ花ヤカニテナム[16]」と讃えられ、「和歌の上手、管絃の道にもすぐれ[17]」ており、三十六歌仙の一人とされ、『後撰和歌集』以下勅撰集には計 30 首入集している典型的な平安貴公子である。

『大和物語[18]』には、敦忠は『小倉百人一首』38 番歌作者で醍醐天皇の妃に仕えていた女房の右近、藤原忠平の娘で醍醐天皇の第二皇子保明親王の妃である貴子、醍醐天皇の皇女で伊勢の斎宮である雅子内親王の三人と恋人関係であることが伝えられている。伝承めいた歌物語での記録であるが、敦忠が身分貴き女性たちに贈った恋い焦がれる歌からは、彼の色好みを垣間見ることができる。また、西本願寺本『三十六人集』所収『敦忠集』に収められている百四十五首の歌がほとんど恋歌であることからも、彼の華々しい女性遍歴が窺える。

さて、『独立器官』に引用されている敦忠の「逢ひ見ての」歌は、『小倉百人一首』の 43 番にあたり、『拾遺和歌集』恋の部に「題知らず」として収められているが、『拾遺和歌集』の前段階の私撰集である『拾遺抄』では、「はじめて女のもとにまかりて、またの朝に遣はしける[19]」と、初めて一夜を共にして契りを結んだ後に、男が女に贈った後朝の歌であるとしている。さらに、意図的に物語的

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

平公仍実国経子云々」とある。ところで、『世継物語』は、敦忠母は藤原国経の妻であったが、国経が酒に酔った勢いで甥の時平に譲った話を描いた後、「かくてある程にうつくしけなるおのここうみつその子中納言に成て本院の中納言あつたたと云は此人成けり誠わすれにけり」と続くことから、敦忠は国経の子だという説が生まれた(『世継物語』西尾市立岩瀬文庫蔵(48 ウ)国文学研究資料館日本古典籍総合目録デーダベースに拠る)。

16 『今昔物語集 3』巻第 24「敦忠中納言南殿桜読和歌語第三十二」新編日本古典文学全集 37、小学館 p.329。

17 『大鏡』新編日本古典文学全集 34、小学館 p.83。

18 『竹取物語/伊勢物語/大和物語/平中物語』新編日本古典文学全集 12、小学館 pp.307-308、pp.31-316。

19 竹鼻績(2014)『拾遺抄注釈』笠間書院 p.581。

に編纂される性格が認められている[20]私家集の『敦忠集』には、意味深長な詞書が添えられ、贈答する相手の歌も同時に収録されている。

みくしげどののべたうにしのびてかよふに、おやききつけてせいすとききて

いかにしてかくおもふてふことをだに人づてならで君にかたらむ

あひみてののちのこころにくらぶればむかしはものもおもはざりけり[21]

二首は平安後期に後撰集、拾遺集から増補されたものだと見られる[22]が、このように並べられると、もう一つの敦忠と御匣殿の別当の悲恋物語が出来上がっている[23]。

御匣殿（みくしげ）の別当は太政大臣藤原忠平の娘貴子であり、醍醐天皇の皇太子保明親王の女御だった女性である。詞書には、敦忠が忍んで通っていることを、親の忠平が邪魔したと語られている。貴子が御匣殿の別当になったのは、夫の保明親王が夭折した後のことなので、敦忠が通っていた時に貴子は御息所という身分である。何と言っても敦忠の父時平は皇太子保明親王の早死にの原因を作った張本人とされ[24]、政権は庶流の忠平に継承された混乱の時期である。もしこの詞書は実際の敦忠の恋物語であれば、これほど複雑な政治がらみ

台灣日語教育學報第33號　禁止複製

20 瀬尾博之（2008）「私家集の物語性について―『敦忠集』を題材として―」文学研究論集 28、明治大学大学院 pp.203-218。

21 『敦忠集』『新編国歌大観第 3 巻 1 私家集編 1 歌集』角川書店 pp.57-58。但し、第四句は「昔はものを」と「昔はものも」との本文異同がある。

22 同注 21、島田良二「解題　敦忠集」p.856。

23 詞書は「逢ひ見ての」歌までにかからないという見解もあるようだが、本稿では目崎徳衛（2005）（『百人一首の作者たち』角川ソフィア文庫 pp.185-188）の解釈に従う。

24 『日本紀略』には、時平の娘が生んだ皇太子保明親王の夭折は、時平の讒訴により太宰府に左遷された菅原道真の祟りの仕業だと言い、「挙世云、菅師霊魂宿忿所為也」と記している（黒板勝美、国史大系編修会編（1965）『日本紀略』「醍醐天皇延長元年三月二十一日条」増補新編国史大系第 11 巻、吉川弘文館 p.25）。

の恋を成就しようとする気力と胆力が敦忠にはあったのだろうか。

後朝の歌にせよ、悲恋の歌にせよ、一首に詠まれる鬱々とした寂寥感と喪失感は、『独立器官』における渡会医師の、完璧な独身主義者というプライドを捨てて初めて女性に心を奪われた時の心情を語るのに最適なのである。

渡会医師はこの女性のことを、「彼女は私にとって特別な存在だからです。総合的な存在とでも言えばいいのでしょうか。彼女の持っているすべての資質が、ひとつの中心に向けてぎゅっと繋がっているんです。そのひとつひとつを抜き出して、これを誰より劣っているとか、勝っているとか、計測したり分析したりすることはできません。そしてその中心にあるものが私を強く惹きつけるのです。強力な磁石のように。それは理屈を超えたものです[25]」と説明した後、「逢ひ見ての」歌を口ずさんだ。なぜここまでこの女性に惹かれるか、その気持ちは自らの言葉では解釈できず、ただ敦忠のこの一首に託すのみ、と渡会医師は思っている。渡会医師は、一首が「恋しく想う女性と会って身体を重ね、さよならを言って、その後に感じる深い喪失感[26]」を詠む歌として理解し、「その歌の作者がどういう気持ちを抱いていたのか実感できるようにな[27]」ったと、敦忠歌を持ち出した理由を語った。ここで、渡会医師は「逢ひ見ての」歌を後朝の歌と見ているようだが、その後、「何週間も会えなくなります。そういう時期はかなりこたえます。彼女にもうこのまま二度と会えないんじゃないか[28]」と、会って別れた後の気持ちは会わなかった前より辛いと言ったり、「一年半こうしてつきあっていますが、一年半前より今の方が、ずっと深く彼女にのめり込んでい[29]」ると、女性に対する執着が付き合っていくうちに次第に強くなると告白したりする形で、敦忠歌を拡大解釈している。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

---

25 村上春樹（2014）『独立器官』『女のいない男たち』文藝春秋 p.137。
26 同注 25、p.138。
27 同注 25、p.138。
28 同注 25、p.144。
29 同注 25、p.145。

ところで、渡会医師の風流で色好みの貴公子像は、『源氏物語』の主人公光源氏にも幾分似通っているところがある。厳密に言うと、光源氏に似通っているのは敦忠のほうである。御息所と斎宮との交際経験や、貴子に贈った「物思ふと過ぐる月日も知らぬまに今年は今日に果てぬとか聞く[30]」歌を本歌に詠じられた「幻」巻における光源氏の絶唱から、敦忠も光源氏のモデルの一人であると考えられよう。何よりも、渡会医師が 52 歳で亡くなると設定されているが、それは『源氏物語』が描く光源氏の最後の年と同じであることは全くの偶然とは言いがたい。

3.2. 恋の敗残者

渡会医師の恋はまさかの結果となった。「気楽な『ナンバー２の恋人』」としても「便利な『雨天用ボーイフレンド』」としても「手頃な『浮気の相手』[31]」としても、常に複数のガールフレンドとの付き合いを楽しんできた渡会医師は、真剣に恋している女性に会えないと「身体がまっ二つに引き裂かれるよう[32]」になるほど真剣になってしまった。そのような気持ちになってから渡会医師は、もしナチの強制収容所に入れられたユダヤ人のように、自分の存在の証しとも言える肩書きや資産をすべて奪われたら「私とはいったいなにものなのだろう[33]」と自問し続ける。恋愛も社会地位も金銭も何一つ不自由ではなかった渡会医師は、初めて恋の敗残者となった。この失敗によって、これまで恋と同等に考えてきた身分や経済力の喪失までも怖れるようになった。

恋多き男性の失恋譚は古今東西に伝わっている。敦忠もまたその一人である。『敦忠集』に収められている 145 首の歌には、ただ一人の女性（雅子内親王）との贈答歌が実に百首にものぼる。『大和物語』には敦忠と醍醐天皇の皇女雅子内親王に対するやるせない気

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

---

30 『後撰和歌集』（巻八冬 506 番）新日本古典文学大系、岩波書店。
31 同注 25、p.122。
32 同注 25、p.144。
33 同注 25、p.139。

持ちが記されている。

　これも同じ中納言、斎宮の皇女を年ごろよばひ奉り給うて、今日明日あひなむとしけるほどに、伊勢の斎宮の御占にあひたまひにけり。「いふかひなく口惜し」と思ひ給うけり。さて詠みて奉り給ひける。

　伊勢の海の千尋の浜に拾ふとも今はかひなく思ほゆるかな[34]

伊勢の斎宮に決まった今では、いくらあなたが恋しくても甲斐無いことと思われるよ、と敦忠が詠んでいる。伊勢神宮に仕える斎宮は、未婚の内親王または女王から選出するが、卜定によって決定する。「かひなし」の一言で、占いで決められた運命への怒りと失敗に終わった恋への悲しみが剥き出されている。その後、皮肉なことに、雅子内親王は斎宮解任後に忠平の次男師輔に娶られることとなった。

『独立器官』における渡会医師は、敦忠と雅子内親王のような離れ離れの運命でこそないものの、女性に結構な金額の金を取られた最後、第三の男の出現によって最悪の結末を迎えた。まさに敦忠の悲恋に終わった物語のような筋書きである。

3.3. 悲劇的な死

恋の「重症」にかかってしまった渡会医師は、ついに自分で自分を死に至らしめた。秘書の後藤青年が渡会医師の死を知らせるために語り手の谷村に連絡したのは、渡会医師が谷村に恋の告白を聞かせてから2ヶ月後のことである。渡会医師は拒食症にかかり、「自分を無にして[35]」、「生き続ける意志を放棄し[36]」、「死ぬ覚悟を決めてい[37]」た。渡会医師の死に方に対して、後藤青年は「それは恋

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

---

[34] 同注 18、p.316。
[35] 同注 25、p.157。
[36] 同注 25、p.158。
[37] 同注 25、p.161。

するあまり食べ物が喉を通らなくなり、それで実際に命を落とした人なんて世間にはまずいない[38]」とコメントし、「たしかにそんな話は他に耳にしたことがない[39]」と谷村が同意した。

ところが、歴史上には「不食の病」により命を落としてしまった有名な事件がある。天徳四年内裏歌合の際、平兼盛と壬生忠見が「初恋」という題で左右に番えて歌を詠じたが、判者の藤原実頼と源高明が二人とも勝敗を定めかねるため、村上天皇の意向を斟酌して兼盛歌を勝ちにした。その後、忠見はこの一件により、「心憂く覚えて胸ふさがりて、それより不食の病付きて……遂に身まかりにけり[40]」と『沙石集』に記されている。不食の病で亡くなった部分は作者無住の創作だと考えられているが、歌合での判定事情については実頼の日記にも記され、恐らく事実であろう。

注目すべきは、後年、この二人の対決の歌が『小倉百人一首』の40番と41番に配置されて、それに続く43番に『独立器官』に引用された敦忠歌が出てくることである。間には42番の清少納言の父清原元輔歌が置かれているが、もし仮に村上春樹が敦忠歌を物語の核心に据える着想を得た際に、壬生忠見の悶死事件も視野に入れたとすれば、『1Q84』における『平家物語』の引用以上に、高度な摂取手法が駆使され、彼の古典教養の深さが再び証明されることになろう。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

4.古典的手法の新しさ

村上春樹が幼い頃から不本意でありながらも身につけてきた日本古典文学の素養は、渡会医師の人物造形のみならず、物語全体の構成にも消化されている。彼は、『若い読者のための短編小説案内』が文庫化された折に書いた序文には、「僕は短編小説を、ひとつの実験の場として、あるいは可能性を試すための場として、使うこと

---

38 同注25、p.161。
39 同注25、p.161。
40 『沙石集』新編日本古典文学全集52、小学館p.290。

があ[41]」ると言い、『女のいない男たち』の「まえがき」に、「短編小説をまとめて書く時はいつもそうだが、僕にとってもっとも大きな喜びは、いろんな手法、いろんな文体、いろんなシチュエーションを短期間に次々に試していけることにある[42]」と述べている。『独立器官』はまさに彼の言う実験の場である。

4.1 〈渡会医師説話〉の生成

村上春樹は、ジェーン・ルビン氏の英訳した『芥川龍之介短編集』のために序文を執筆した。芥川の短編小説といえば、平安末期から中世にかけて流行した説話文学より取材した様々な翻案物である。『芥川龍之介短編集』の第一部「さびれゆく世界」に収録された 6 篇の中、『羅生門』『藪の中』『鼻』『竜』『地獄変』の 5 篇が『今昔物語集』を題材にした作品である。その序文に挙げられた村上春樹にとっての日本の国民作家には、芥川はもちろん、谷崎潤一郎の名も見られる。夏目漱石と並び、谷崎も村上春樹が好きな日本作家の一人である[43]ことから、『海辺のカフカ』では大島がカフカに『潤一郎訳源氏物語』を勧めた理由も納得できる。その谷崎もまた『今昔物語集』の説話を題材に小説を創作する一人である。最も有名なのは、戦後谷崎文学の傑作と称された『少将滋幹の母』であり、『今昔物語集』巻第二十二「時平大臣取国経大納言妻語第八」をベースに、『平中物語』や『十訓抄』など多くの古典作品に伝わる逸話が取り入れられて創作されたものである。その書名にもなっている主人公滋幹母は、「逢ひ見ての」歌の作者敦忠の母であることは看過できないことである。

このように一連の繋がりを見ると、村上春樹が『独立器官』を創

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

---

41 村上春樹（2004)「僕にとっての短編小説――文庫本のための序文」『若い読者のための短編小説案内』文春文庫 p.13。

42 同注 14、p.11。

43 村上春樹は 2013 年の春、京都大学で行われた「河合隼雄物語賞・学芸賞」の創設記念で講演した後、参加者から読書体験について質問された時に、「好きなのは夏目漱石、谷崎潤一郎、第三の新人など」と答えた（2013/5/6 付日本経済新聞　電子版「春樹さんと参加者との質疑応答」2018 月 2 月 22 日閲覧 http://www.nikkei.com/article/DGXNASFK0602F_W3A500C1000000)。

作する際に、敦忠歌のみならず、和歌とその周辺に纏わる説話を「実験」の対象として用いても何の不思議もない。

『独立器官』の序盤と終盤には、それぞれ次のような語り手の断りが書かれている。

> 僕が渡会という人物について当初知り得たことを、ここでひととおり記述しておきたい。その大半は<u>僕が彼自身の口から直接聞いた</u>ことだが、彼の親しくしている――そして信頼するに足る――<u>人々から集めた話</u>も部分的に混じっている。あるいは<u>僕が観察した彼の日頃の言動</u>から、「きっとこういうことだろう」と<u>個人的に推測</u>したことも多少含まれている[44]。

> 渡会医師のことを忘れないために、僕はこの文章を書いている。……<u>関係者に迷惑をかけないために、名前や場所は少しずつ変えてある</u>が、出来事自体はほぼそのとおり、実際にあったことだ。<u>後藤青年がどこかでこの文章を読んでくれればと思う</u>[45]。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

渡会医師の物語は、語り手が直接見たり聞いたりしたことや、人々から集めた話、語り手の観察によって理解したことなどに、一部語り手の推測も加えられて書き留められ、そして誰かに読まれることが想定されている、という設定である。つまり、〝見聞〟と〝口承〟によって採取した話に〝改編〟を加えたうえで、〝記録〟して〝伝播〟するという執筆の方法と意図が、語り手自身によって説明されているのである。次節以下で詳述するが、ここで宣言された物語のあり方は、見事に『独立器官』を一篇の渡会医師説話として完成させている。

4.1.1 〈渡会医師説話〉の方法

口承と書承は説話伝承の基本方法である。多くの説話集は、説話

---

44 同注 25、p.120。

45 同注 25、pp.163-164。

の収集方法と編纂方針を序文に示し、書承の出典を各話の冒頭や末尾に明記している。『十訓抄』の序文には、「今何となく聞き見るところの昔今の物語[46]」を素材に本書を編纂したと、説話の収集方法が書かれている。あるいは仏教説話集である『沙石集』の序文には「見し事聞きし事[47]」を、世俗説話集である『古今著聞集』の跋文には「時にとりてすぐれたる物語[48]」を集めて書き記すというように、それぞれ編者自身が見聞きした（書物によって伝えられたことをも含む）ことをこれから語って（＝記録して）いこうと明確に記されている。また、歴史物語と分類されているが説話的要素が随所に見られる『大鏡』の冒頭には、語り手の世継が、「年頃、昔の人に対面して、いかで世の中の見聞くことをも聞こえあはせむ。このただ今の入道殿下の御有様をも申し合はせばやと思ふ[49]」と言い、これから語ろうとする内容を読者に示している。

これに似た手法で、『独立器官』においても語り手は、「僕が渡会という人物について当初知り得たことを、ここでひととおり記述しておきたい[50]」とまず本話の主人公を明記し、そして様々な伝達ルートを通じて渡会医師を知ったことを、物語の冒頭でまず示している。

説話は「き」と「けり」の二つの助動詞を用いて、説話の伝承者が自ら体験した過去と、他人から伝え聞いた過去の出来事を語り分けることがある。現代文ではその違いが文体で表現しにくいが、『独立器官』においては、伝承者である谷村は、渡会医師の話は自分自身が体験した事実であることを繰り返し強調している一方、後藤青年が説話の話し手として、谷村の知らなかった渡会医師に関する話を補足説明していることによって、一話は体験談と伝聞譚とが交じりあっていることが理解される。

46 『十訓抄』新編日本古典文学全集 51、小学館 p.17。
47 同注 40、p.14。
48 橘成季編『古今著聞集』新潮古典文学集成、新潮社 p.411。
49 同注 17、p.17。
50 同注 25、p.120。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

4.1.2 〈渡会医師説話〉の目的

中世説話のほとんどが仏教的色彩の濃い話であるため、その記録・編纂する目的も多くは狂言綺語観[51]に基づくものである。一方で、巷説や歴史事件を題材にした説話は、後世に向けて発信する人生の教訓として書き留められるものが多い。これらに対して、渡会医師説話は、「渡会医師のことを忘れないために、僕はこの文章を書いている[52]」と語り手が述べているように、個人的な思いでいわば渡会医師を弔うために記録されたものである。

ここで想起されるのは、説話的要素の強い『平家物語』の成立事情に、敗北者の怨霊鎮魂と平家一門の追善供養という二つの側面が認められていることである。佐伯真一氏は、鎮魂物語の語り方には二つの方向があり、「一つは死者の立場に立った語り」で「ヨリマシに死者の霊を憑依させ、霊に語らせた上でそれ鎮める」という形であり、「もう一つは死者に対する生者からの語り」で「死者の美化や死者への同情などを盛り込んで語ることにより、生者の立場から死者を慰める」という形であると述べ、『平家物語』は後者に属していると指摘している[53]。『独立器官』もまた、語り手が語った「僕は渡会医師をとても気の毒に思う。彼の死を心から悼む[54]」という言葉のように、亡くなった渡会医師に捧げる鎮魂の物語とも言えよう。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

4.1.3 〈渡会医師説話〉の方針

『独立器官』の終盤には、語り手は「関係者に迷惑をかけないために、名前や場所は少しずつ変えてある[55]」と説明したうえで、「出

---

[51] 巧みに飾った言葉は衆生を仏道に導くための手段である。『白氏文集』の「願以今生世俗文字之業、狂言綺語之過、転為将来世世讃仏乗之因、転法輪之縁」に由来する。つまり、仏法と結縁するために説話が語られ、説話集が編纂されるのである。

[52] 同注 25、p.163。

[53] 佐伯真一（2017）「『平家物語』は鎮魂の書か」松田浩、上原作和ほか編『古典文学の常識を疑う』勉誠出版 p.131。

[54] 同注 25、p.165。

[55] 同注 25、p.164。

来事自体はほぼそのとおり、実際にあったこと[56]」と付け加え、話の信憑性が疑われないように念を押している。こういった語り手の表白にも、説話的発想を読み取ることができる。

周知の通り、『今昔物語集』の本文には空白の箇所が散見される。それは説話集を編纂する時点で明確でないことを後日書き入れるために残した、漢字表記を期した意識的欠字である。その多くは人名や地名であることから、説話が伝承される際に様々な理由で人物や場所が特定できなくなったものだと考えられる。『宇治拾遺物語』巻第十三ノ五「夢買ふ人の事」における、主人公「ひきのまき人」という人物が、奈良時代末期の学者である吉備真備を指していることは定説化している。故意の改変か、書写の誤りかは定かではないが、『宇治拾遺物語』の編者（＝伝承者）は吉備真備を「ひきのまき人」として書き伝えている。同じように、渡会医師説話を執筆する際に登場人物や場所の名を変えたがそれは嘘ではなく事実であった、という語り手が意図的に執筆方針を強調している部分も、まさしく説話的な語り方である。

4.2 〈渡会医師説話〉における説末評語

説話は基本的に、ある人物や土地に纏わる話と、編著者のその話に対する感想や批評とで構成されている。編著者の感想や批評は一話の終わりに置かれているため、話末評や話末評語と呼ばれることがある。また評語が長文化している場合、説話評論[57]とも称されている。

話末評語は説話ごとに付加されるが、その目的は説話の編纂意図と異なるものではなく、『十訓抄』の序文に書かれたような「良きかたをばこれをすすめ、悪しきすぢをばこれを誡めつつ、いまだこの道を学び知らざらむ少年のたぐひをして、心をつくる便となさし

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

---

[56] 同注 25、p.164。

[57] 説話評論は西尾光一（1963）（『中世説話文学論』塙書房）が提示した用語で、長く研究者に使われてきたが、この用語の定義に疑問を呈する研究者もいる（小峯和明（1985）「説話文学研究の三十年」中世文学 30 号、pp.92-102）。

めむがため[58]」のものもあれば、『古今著聞集』の跋文に書かれたような「すみやかに三十巻狂簡の綺語をもて、翻して四八相値遇の勝因とせん[59]」ものもある。このように、説話を語ることによって様々な世相が伝えられ、そこから得た教訓によって人々が正しい道へと導かれることを願って説話集は編纂されることから、説話は「説示の文学」とも言われている。

『独立器官』においても、話末には、語り手による渡会医師の恋愛観についての批評が見られる。「彼女の心が動けば、私の心もそれにつれて引っ張られます。ロープで繋がった二艘のボートのように。綱を切ろうと思っても、それを切れるだけの刃物がどこにもない」という、かつて渡会医師が話した言葉を思い出し、谷村は「彼は間違ったボートに繋がれていたのだと、我々はあとになって思う[60]」とコメントし、渡会医師が運悪く誤った相手と付き合ったのだと考えている。しかしその続きには、谷村はこうも続けている。

> 思うのだが、その女性が（おそらく）独立した器官を用いて嘘をついていたのと同じように、もちろん意味あいはいくぶん違うにせよ、渡会医師もまた独立した器官を用いて恋をしていたのだ。それは本人の意思ではどうすることもできない他律的な作用だった[61]。

『沙石集』においては、無住は忠見の悶死事件について、「執心こそよしなけれども、道を執する習ひ、げにも覚えて、哀れなり[62]」と評している。執心はつまらないものだが、道に執着することはごもっともだという。道とは歌道を指しているだろう。『独立器官』の谷村も、無住と同じような見地に立ち、渡会医師の恋に対する執

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

---

[58] 同注 46、p.17。
[59] 同注 48、p.414。
[60] 同注 25、p.166。
[61] 同注 25、p.166。
[62] 同注 40、p.290。

着を否定的に考えてはいないのである。

5.終わりに

以上、『独立器官』における説話文学の摂取方法をテクストの叙述を以て検討した結果、『独立器官』は、様々に規定されている説話の〝型〞に渡会医師の悲恋物語を嵌め込んで、渡会医師説話を仕立て上げていると言える。しかしながら、『独立器官』は説話ではない。巧みに構成されたストーリーの中で深い人間心理が描写されている現代小説である。

『独立器官』は、敦忠歌を物語の中心に据え、敦忠の色好みの貴公子像を主人公渡会医師に重ね、中世説話的手法を以てストーリーを展開していく。短編小説を実験の場として使う、という村上春樹自身の言葉があるように、『独立器官』は日本古典文学の創作方法を駆使した実験的小説と見て良いはずである。

村上春樹が日本古典文学を享受する際、原典に忠実にしようとする姿勢が見られたが、決して芥川や谷崎のように歴史小説を目指してはいない。作品から読み取れる日本的な種々様々は、彼の中にある「日本的なるもの」の自然な表出とでも言えようが、むしろ、彼が好んで世界文学を作品に取り入れているように、日本文学や文化的要素を意図的に作品の素材として扱っていると考えるのが適当ではなかろうか。ただし、春樹小説と古典文学とは、単なる〝引用と被引用〞の関係ではない。『1Q84』における「壇ノ浦の合戦」の暗唱のように、作中人物であるが、語り物としての『平家物語』がふかえりによって現代に語り継がれている。『海辺のカフカ』における『源氏物語』と『菊花の約』の概説や、『独立器官』における敦忠歌の解釈からも、春樹小説の、古典文学の伝統を守りつつも新たな読みを切り拓こうとする意図が理解されるのである。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

テクスト

浅見和彦校注・訳（1997）『十訓抄』新編日本古典文学全集 51、日本、小学館

片桐洋一校注（1990）『後撰和歌集』新日本古典文学大系、日本、岩波書店

片桐洋一ほか校注・訳（1994）『竹取物語／伊勢物語／大和物語／平中物語』新編日本古典文学全集 12、日本、小学館

小島孝之校注・訳（2001）『沙石集』新編日本古典文学全集 52、日本、小学館

橘健二、加藤静子校注・訳（1996）『大鏡』新編日本古典文学全集 34、日本、小学館

橘成季編、西尾光一、小林保治校注（1986）『古今著聞集（上・下）』新潮日本古典集成、日本、新潮社

馬淵和夫ほか校注・訳（2001）『今昔物語集 3』新編日本古典文学全集 37、日本、小学館

村上春樹（2002）『海辺のカフカ（上）』日本、新潮社

同（2009）『1Q84 BOOK1〈4 月-6 月〉』日本、新潮社

同（2014）『独立器官』『女のいない男たち』日本、文藝春秋（初出「女のいない男たち 4　独立器官」『文藝春秋』平成 26 年 3 月号）

『敦忠集』新編国歌大観第 3 巻、日本、角川書店

＊私意に即して適宜、下線・省略を示す三点リーダ（……）を施し、古文の場合は仮名を漢字に改め、濁点・句読点を付した箇所がある。

参考文献

阿部秋生、今井源衛ほか校注・訳『源氏物語』新編日本古典文学全集 24、日本、小学館

河合隼雄（1998）『こころの声を聴く―河合隼雄対話集―』新潮文庫、日本、新潮社

台灣日語教育學報第33號　禁止複製

黒板勝美、国史大系編修会編 （1965）『日本紀略』増補新編国史大系 11 巻、日本、吉川弘文館
小林保治、増古和子校注・訳『宇治拾遺物語』新編日本古典文学全集 50、日本、小学館
小峯和明（1985）「説話文学研究の三十年」中世文学 30 号、日本、中世文学会
佐伯真一（2017）「『平家物語』は鎮魂の書か」松田浩、上原作和他編『古典文学の常識を疑う』日本、勉誠出版
島津忠夫編著（1982）『百人一首古注抄』日本、和泉書院
瀬尾博之（2008）「私家集の物語性について―『敦忠集』を題材として―」文学研究論集 28、日本、明治大学大学院
竹鼻績（2014）『拾遺抄注釈』日本、笠間書院
谷崎潤一郎（1953）『少将滋幹の母』新潮文庫、日本、新潮社
西尾光一（1963）『中世説話文学論』日本、塙書房
半藤一利編（1979）『文藝春秋』昭和 54 年 9 月特別号、日本、文藝春秋
細川幽斎（1631）『百人一首抄』日本、跡見学園女子大学図書館所蔵
村上春樹（1997）「まずはじめに」『若い読者のための短編小説案内』日本、文藝春秋
同（2004）「僕にとっての短編小説――文庫本のための序文」『若い読者のための短編小説案内』文春文庫、日本、文藝春秋
同（2007）「芥川龍之介――ある知的エリートの滅び」ジェーン・ルビン編『芥川龍之介短編集』日本、新潮社
同（2014）「まえがき」『女のいない男たち』日本、文藝春秋
村上龍、村上春樹（1981）『ウォーク・ドント・ラン』日本、講談社
目崎徳衛（2005）『百人一首の作者たち』角川ソフィア文庫、日本、角川書店

台灣日語教育學報第33號 禁止複製

『世継物語』日本、西尾市立岩瀬文庫所蔵（国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベースに拠る）

インターネット資料

http://www.nikkei.com/article/DGXNASFK0602F_W3A500C1000000（2013/5/6 付『日本経済新聞』電子版「春樹さんと参加者との質疑応答」2018 月 2 月 22 日閲覧）

付記

本稿は、2017 年度台湾日本語文学会国際学術研討会（2017 年 12 月 16 日於天主教輔仁大学）における口頭発表をもとに、爾後の研究内容を書き加えたものである。席上及び発表後にご意見やご教示を賜った先生方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

台灣日語教育學報第33號 禁止複製